

# アラトリステが生きた時代のスペイン

加藤晃生（翻訳家・社会学者・小説「アラトリステ」共訳）

## スペインとオランダの八十年戦争

本作の主人公、ディエゴ・アラトリステは16世紀の終わりにカスティリーヤ王国のどこかで生まれた剣客です。彼は傭兵としても数多くの戦場を経験し、1643年にフランスのアルデンヌ地方にあるロクロワの町の近くでフランス軍と戦って戦死しました。本稿では彼が生きた時代のスペインとはいかなる場所であったのかを解説してみたいと思います。

まず、映画の冒頭および中盤において彼が兵士として戦っているフランドルという場所について見てみましょう。現在ベルギー王国・オランダ王国となっている地域は、彼が生きた時代には一括してネーデルラントと呼ばれ、スペイン王家の領地となっていました。しかし16世紀後半、ネーデルラント総督は軍事力にモノを言わせて在地の有力貴族や自治都市の権益を奪う政策をとった為、反発した人々がオラニエ公爵家を指導者として大反乱を起こします。スペインに刃向かった勢力はネーデルラントの北部の7つの州に集まりましたが、これら北部7州は16世紀の終わりにはネーデルラント連邦共和国（オランダ）として、なし崩し的に独立してしまっただけです。当然、スペインは軍隊を送り込んで反乱を鎮圧しようとします。この戦いは1568年から1648年まで80年間も続いたので、「八十年戦争」と呼ばれています。戦場となったのは、現在の行政区分で言えばベルギーのオスト・フランドレン州、ヴェスト・フランドレン州、アントウェルペン州およびオランダのゼーラント州、ノルト・ブラーバント州で、本作でフランドルと呼ばれているのは概ねこれらの地域です。ちなみに映画の中盤で登場するブレダの町はノルト・ブラーバント州にあります。

## 兵士たちの過酷な日常

では、ネーデルラントでオランダ軍と戦っていたのはどのような人々だったのでしょうか？ これは大きく二つに分かれます。貴族と平民です。軍隊の司令官は配下の兵士たちの給料や食糧・武器などの代金を自腹で立て替えることもあったので、公爵家の当主や王族のような最上級の貴族にしか務まりませんでしたし、その下にいる連隊長や中隊長な

どの士官たちも貴族の家の次男坊や三男坊が務めていました。貴族の家の嫡男が自分の経歴に箔を付ける為に戦場に出ることもありました。冒頭のシーンのグアダルメディーナ伯爵もその口で、彼は生業として軍人をやっているわけではありませんから、適当な所で戦場暮らしを切り上げてスペインに戻ることが出来ました。一方、平民出身の兵士たちは皆、貧しい家に生まれて故郷には仕事も無く、軍人になるか犯罪者になるかという状況に追い込まれた人々でした。しかしその待遇は劣悪で、給料の遅配は日常茶飯事でしたし、戦争が終われば即解雇される不安定な立場でした。遅配や解雇で追い詰められた兵士たちは群盗と化し、近所の町や村を襲って略奪を繰り返しました。

## カトリック国家スペインと異端審問所

次にスペイン国内に目を向けてみましょう。スペインは昔も今もカトリックの国ですが、この時代のカトリックの高位聖職者は強力な権力と莫大な富を手にしていました。本作に登場するボカネグラ神父もその一人と出ることが出来るでしょう。またスペイン人はプロテスタントを異端として蔑視しておりましたから、カルヴァン派に改宗したオラニエ公爵家率いるオランダは宗教的にも不倶戴天の敵でしたし、英国教会の親玉であるイングランド王家などにスペインの王女を嫁がせるなどどんでもない考える人も多かったのです。加えてユダヤ人を蔑視する風潮も強く、1478年に設置されたスペイン独自の異端審問所は改宗ユダヤ人やその子孫を、隙あらば「隠れユダヤ人」として断罪しようとしていました。映画の中でも異端審問所の追及に怯える人物が登場しますが、当時は何代か前の先祖にユダヤ人が居るというだけで、運が悪ければ過酷な拷問の果てに最悪火炙りという時代だったのです。

## 寵臣オリバーレス伯爵の苦悩

さて、当時のスペイン国王はフェリペ4世でしたが、彼は政治には殆ど関心が無く、狩りと芸術に明け暮れる人物でした。特に絵画の収集家としては名高く、ブラド美術館の